

論文の内容の要旨

氏名：藏 屋 伸 子

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名： Comparison of Politeness Levels in American English and Japanese Requests:

Analysis of Behavioral and Linguistic Data from American and Japanese Film Scenes

（日本語とアメリカ英語の依頼におけるポライトネスレベルの比較：

日米映画場面からの行動と言語データの分析）

本研究は、日本映画とアメリカ映画の依頼場面を談話データとして用いて日本語と英語の依頼行動、依頼表現とその違いを明確にし、異文化間コミュニケーションにおける効果的な依頼方法を探る。国際ビジネス・コミュニケーションと言語教育を本研究の目的とする。

序論として国際ビジネスにおける依頼に興味を持つに至った研究の動機と目的を述べた後、先行研究を展望した。まず、本研究におけるポライトネスの定義には、Ide, Hill, Carnes, Ogino, and Kawasaki (1992, p. 281) の「円滑なコミュニケーションと関連づけた適切な言語使用に関する考え方（筆者訳）」を採用し、ポライトネスレベルを配慮のレベルとする。本研究の対象とする依頼は、Halliday and Matthiessen (2014) が示す、物や行為の要求、情報の要求で、依頼表現のみではなく、前置き、補足情報を含む依頼行動を分析対象の単位とする。そこから一般的なポライトネス理論である Leech (1983)、Brown and Levinson (1987)、Grice (1989)、本研究でコンテクストと呼ぶ依頼行動における背景状況の重要性と、多くの研究者が取り上げているコンテクストを構成する様々な要因を確認した後、日本語と英語における発想の違いとなっている個人主義と集団主義 (Triandis, 1995) と高コンテクスト文化と低コンテクスト文化 (Hall, 1976)、要因の影響の計算例、映画、テレビ、現代劇のシナリオを利用した研究にも触れた。また、前置きに関連して、依頼文前後の補足説明の項目や提示順序、数がポライトネスレベルに影響を与えることを確認した。依頼文においては、文形式、文の長さ、間接性、様々な文法的要素がポライトネスレベルに関係する。ポライトネスレベルの順序、あたかも表現、無難な表現に触れた後、日本語の依頼文では省略形が不可欠であることを確認した。依頼表現の実証研究においては、大学生対象の質問紙調査が多く、質問紙調査に頼ることの危険性とビジネス現場における状況の調査の必要性を確認した。最後に、日本の英語教育におけるポライトネスに着目し、ポライトネスの考え方を教育に反映させる必要性が叫ばれながら、英語教育における依頼があまり調査されていないことを確認した。

次に、2つの研究課題を確立し、本研究の目的と課題を示した。先行研究で明確になった問題点を受け、コンテクストの依頼行動、依頼表現への影響と、その結果の日本語と英語の違いについて調査することを目的とする。2つの研究課題とは、依頼文と依頼の前置き・補足情報に関するもので、依頼のコンテクストを形成する個々の要因が、依頼文のポライトネスレベル、前置き・補足情報の数・タイミング・種類に与える影響を調査するものとする。

本研究の調査対象とする依頼には、一般的な依頼の他、指示、命令を含む。具体的な研究方法を示す前に、まず映画の中の対話の分析対象としての有効性を述べ、分析対象とする映画作品を示した。データ準備では、分析対象映画作品の依頼行動を示すシーンから、中心となる依頼本体を前置き・補足情報、本体以外の依頼表現、聞き手の受諾状況と共に抽出した。変数のレベル化・数値化では、抽出した各依頼シーンのコンテクストを要因によって表すために、先行研究及び予備調査に基づいて14変数を選択し、必要に応じて2段階の信頼性確認を経て、場合分けあるいは5段階の数値化を行った。依頼文の文形式を命令文、平叙文、疑問文、省略形に分類し、ポライトネスレベルに関しては、文形式に加えて間接性を中心に要素、文の長さを考慮するものとした。次にリメイク映画試行分析、談話データ観察、談話分析、談話分析結果と英語教本・教材分析結果との比較の方法を示した後、分析、比較を行い、結果と考察を示した。

リメイク映画試行分析では、2組のオリジナル映画とそのリメイク映画において共通のシーンを日本語の依頼と英語の依頼として比較した。また、そのコンテクストの変数条件が一部異なるシーンとの間で条件の変化が表現に与える影響を観察した。その結果、コンテクストの変化が依頼表現のポライトネスレベルに影響し、その影響は日本語と英語で異なることを確認した。また、全く同じシーンでも、日本語と英

語でコンテキストの捉え方が異なる可能性があることが確認できた。

談話データ観察では、変数を考慮せずにデータを見た。英語では命令文、日本語でも「～しろ」、「～して」、「～してください」の3種類の命令文が依頼形式の大きな割合を占めていた。文形式では命令文が多く、疑問文は少なかった。女性は男性よりも丁寧な形式を好むと言われる傾向が、英語では命令文対疑問文、日本語では命令文・平叙文・疑問文内の敬語比率で確認できた。前置き・補足説明の提示数について、頻度と受諾率で順位に多少の差が見られた。日本語、英語共に、最頻数と高受諾数のどちらも小さな数であったが、その傾向は日本語の方が強く、聞き手責任の文化が提供する情報の数を制限することにつながっていると考えられる。タイミングは、日本語、英語共に前が優勢であるが、この傾向も日本語の方が強かった。日本語に決まった型が存在し、英語では比較的自由に選択しているという意味で、わきまえと自由意志の差が出ているとも言える。受諾例と拒否例を比較すると、拒否例の方が補足説明が多い。種類については、注意喚起と理由が重要で、両方が前に提示される例が多かった。最頻条件は、上司から部下への通常業務の指示の場面と言え、命令形が多かったが、ポライトネスレベルの高い疑問文を使っている例も含まれていた。

談話分析では、依頼文の文形式とポライトネスレベル、前置き・補足情報の提示数・タイミング・種類、依頼文の繰り返し・言い替えへの主な変数である緊急性、遂行義務、能力・難易度、負荷、利益、上下関係、親疎の個々の影響とすべてを考慮した最頻数のコンテキストの影響を男性話者のシーン中心に分析した。依頼形式のポライトネスレベルは、変数のレベルごとの文形式の分布状況とレベル間の変化、日本語においては敬語比率の分布と変化に基づいて行った。その結果、基本的に話し手に不利な条件でポライトネスレベルが上がり、日本語より英語、女性より男性に影響が強い場合が多かった。緊急性、遂行義務、能力・難易度、負荷は日本語男性より英語男性に影響が大きく、上下関係、親疎は英語男性より日本語男性に影響が大きいことがわかった。日本語、英語共に、女性は男性よりもポライトネスレベルが高いが、英語女性は話し手にとって非常に有利な場面のみポライトネスレベルを下げ、日本語女性は狭い範囲でポライトネスレベルを変化させると言える。また、能力・難易度、負荷の話し手に不利な場面で男性にポライトネスレベルの低い表現、遂行義務が高い場面で日本語話者、能力・難易度、負荷の話し手に有利な場面で英語女性にポライトネスレベルの高い表現が増える言い回しの意図的な操作も観察できた。前置き・補足情報に関しては、代表値及び箱ひげ図に基づいて分析を行った。緊急性、遂行義務、能力・難易度、負荷において、基本的に話し手に不利な条件で合計数が増加し、注意喚起、理由、条件追加の順で種類が選択されやすいと言える。提示タイミングでは、大至急及び能力・難易度、負荷の話し手に不利な場面で前への依存度が下がる傾向が見られた。また、依頼文の繰り返し、言い替えは、大至急及び能力・難易度、負荷の話し手に不利な場面でより多く見られた。最頻条件では、日本語よりも英語の方が提示数が多いことが見て取れたが、今回取り扱ったすべての変数が同じ条件であっても結果にばらつきがあり、文形式と前置き・補足情報の組み合わせではポライトネスレベルが一定にはならず、ポライトネスレベルが低い文形式は前置き・補足情報が少なく、ポライトネスレベルが高い場合は多くなっていると言える。間接性の高い文形式では、内容を明確にするために前置き・補足情報を増やし、内容が確実に伝わるようにしているためと考えられる。

日本で入手可能な24冊の英語文法書と20冊の高校オーラルコミュニケーションI教科書、各10冊のビジネス英語教材、英語の敬語に関する文献において、依頼を扱っている項目と扱い方、ポライトネスレベルや日本語と英語での使い分け基準の違いの記述を確認し、その結果と談話分析結果とを比較した。英語文法書では、**could** が多くの場合無難な表現となると言え、命令文は概ね使用を控える方が良いとされていたが、本研究の談話分析では、疑問文の例が少なく、命令文が圧倒的という結果であった。高校英語教科書、ビジネス英語教材、英語の敬語の文献では、学習者を混乱させないよう厳選された表現と説明が紹介されていたが、談話分析では多様な表現が見られた。

最後は結論である。今回特に詳細に調査した依頼のコンテキストを構成する7要因は、日本語と英語の両方で、依頼行動における依頼文のポライトネスレベル、前置き・補足情報の提示数・タイミング・種類に影響を与えることがわかった。日本語と英語の間や男女間で影響の大きさの差はあっても、日本語あるいは英語のどちらかのみに影響するものはなかったと言える。従って、基本的に、個人主義・集団主義の違いを意識しながら、話し手の条件の有利/不利を敏感に判断して強弱を誇張あるいは低減すれば、日本語と英語の間での違いを超える無難な依頼行動、依頼表現を選択できると考えられる。本研究において映画

から抽出した談話データを分析して得た一般的な傾向を実践的で妥当な基準として戦略的に用い、聞き手に期待されるポライトネスレベルを選択することによって、円滑で効果的な異文化間コミュニケーションを実現することが可能である。それは、国際ビジネス交渉、さらには日本語母語話者の英語教育やアメリカ英語母語話者の日本語教育、外交、文化交流にも応用できる。

引用文献

- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness – Some universals in language usage* --. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Grice, P. (1989). *Studies in the ways of words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond Culture*. New York, NY: Random House.
- Halliday, M. A. K., & Matthiessen, C. M. I. M (2014). *Halliday's introduction to functional grammar* (4th ed.). Oxon, UK: Routledge.
- Ide, S., Hill, B., Carnes, Y. M., Ogino, T., & Kawasaki, A. (1992). The concept of politeness: An empirical study of American English and Japanese In R. Watts, S. Ide, & K. Ehlich (Eds.), *Politeness in language* (2nd ed.) (pp. 281-297). Berlin, Germany: Mouton de Gruyter.
- Leech, G. (1983). *Principles of Pragmatics*. Essex, UK: Longman Group.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Colorado, CO: Westview Press.